

炎のエスキース（残照編二〇一三より）

小林守城

凧の糸

引きつける

糸があるから

凧は空に舞うことができる

新しい意図を求めて

子どもらは風の天地に生きる

生きつづけねばならぬ

柵になったら

あらためて透明な凧糸を

みんなの絆としよう

さようなら核のしがらみ

生きつづけねばならぬ

下を向いてもフクシマ

遺言

生きたあかし

異次元の空へ

響くゆらぎ

オーロラのように

続くものは

言葉しかない

小さな生きものの

透き通る黒い瞳から

わたしは

過去へ未来へ

詩の遺言を書く

白い道

朝露の流れゆくまま  
輝いて残る余韻のような  
白い道に尽きせぬ詩がある  
怒りは鎮めればよい

長い沈黙があつたから  
落ち行くときの  
一瞬のまたたき  
後ろ髪を引かれてもよい

何処から湧きだし  
追いかけてくるのか  
憤りの切っ先  
はぎしりしても耐えること

人はそのようにして  
白い道にたたずみ  
ついにさみしさの向こうの  
詩へ抜け出していく

鬼子母神

欲も得もなく皺の寄つた  
重い象の尻の夕映え  
大きな小麦饅頭のような色  
まるい柔らかなわれこみ  
冬の庭 草木に手入れする  
ばあさんの後ろ姿を見つけた

私は聞こえないようにほくそ笑みながら  
ふと少年の枯野に出ていった  
深いふるさとの向こうの  
なんだ 鬼子母神のことではないか  
夕映えは何処かの国での朝焼けである